

令和 4 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03267

研究課題名(和文) 脱植民地化過程の中の遺骨返還と人類学者の公共的役割

研究課題名(英文) Repatriation in the Process of Decolonization and the Public Role of Anthropologists

研究代表者

小田 博志(Oda, Hiroshi)

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：30333579

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：植民地主義とは世界を「文明」と「未開」とに二分して、前者が後者を支配し、収奪するシステムである。先住民族の遺骨の祖先の収奪もその一環として行われた。脱植民地化はこの非対称的な関係性を解消する努力である。そこで先住民族の声が聴かれる場を開き、生きている世界を可視化することが最初の段階であり、遺骨の返還・帰還はその具体的な契機となる。本研究ではその動きを推し進めるために、調査で得られた知見を踏まえて、(1)世界各地の脱植民地化の情報を収めたウェブサイト「脱植民地化のためのポータル」を制作し、(2)植民地化されざる世界の基層を、生命論として理論化する論文(「いのちの網の目の平和学」)を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的・社会的意義はウェブサイト「脱植民地化のためのポータル」(URL: <https://decolonization.jp/>) に表れている。ここでは学術的な調査の結果を、一般の閲覧者もアクセスしやすく、理解しやすいような形で公開した。そこには従来入手が困難であった資料も含まれている。またバーチャル博物館やオンライン・マップのような工夫も盛り込んだ。さらに企画構想の段階から完成まで、ペルー・アヤクチョ、カナダ・ユーコン、日本・サッポロという3つのフィールドに関わる人々と対話的・共働的に作業を進めた。これら情報開示、アクセシビリティ、共働性を軸に公共的責任を具現化し得たと考えている。

研究成果の概要(英文)：Colonialism is a system in which the world is divided into two halves, “civilized” and “primitive”, and on this premise, the former controls and dispossesses the latter. The looting of ancestral remains from indigenous peoples, in the name of “research”, has been practiced as a part of this system. Decolonization is an effort to dissolve this asymmetrical relationship. Its initial steps are to open a space where the voices of indigenous peoples are listened to and, to make their living world visible. The repatriation of their ancestral remains is a concrete opportunity to push forward these steps. In order to promote this movement, we, based on the findings during this study, have (1) created a website “Portal for Decolonization” (URL: <https://decolonization.jp/>) that contains information on decolonization efforts around the world, and (2) published an article in which the uncolonized world is theorized in terms of life (“Peace Studies in/of the Web of Life”).

研究分野：文化人類学

キーワード：脱植民地化 景 repatriation (返還/帰還) 公共人類学 対話の場 共働 倫理 生命論 いのちの風景

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 平和研究の分野を背景として、本研究課題を立案した。平和研究では従来国民国家の単位が明に暗に前提とされてきた。その枠組みのために植民地主義の問題は看過される傾向にあった。しかし植民地主義は様々な平和に関わる事象の深層に横たわる問題である。そのため脱植民地化をテーマに据えた。

(2) 脱植民地化に関わる具体的な事柄として、先住民族の祖先の遺骨の repatriation (返還 / 帰還) が議論され、推し進められている。先住民族の遺骨の収奪には、人類学者が手を染めた過去がある。そのため現在では人類学者は当事者としてその倫理性が問われている。この問題意識を踏まえて、repatriation や脱植民地化を論じるばかりではなく、研究のあり方自体の脱植民地化をも目指した公共人類学的な立場を取ることにした。

## 2. 研究の目的

(1) 先住民族遺骨の repatriation (返還 / 帰還) に関して、過去になぜ、いかにして遺骨の収奪が行われたのか、現在の状況はどうなっているのかを調査を通して明らかにする。

(2) 世界の各地でいかなる脱植民地化を目指した取り組みが行われているのかを調査する。またその過程を促進し得る公共人類学的な研究と実践のスタイルとはいかなるものであるのかを問い、また実際にそれを作り上げていく。

## 3. 研究の方法

(1) 世界各地における repatriation と脱植民地化に関わる現場の調査を、エスノグラフィック・フィールドワークの手法で実施すると共に、歴史的な文脈を明らかにするための文献・史料をも収集して分析を行う。

(2) 多様な当事者の間で対話的・共働的な関係を構築し、それを具現化する「対話の場」を開きながら、そうした関係性を内包し、ひいては「自然 / 文化」の非対称的な分離から解放され、脱植民地化を実現し得るような研究と実践のあり方、および表現の仕方を創造していく。

## 4. 研究成果

次の5つの領域で、本研究課題の成果を表してきた。以下では順に説明していきたい。

- (1) 学会発表
- (2) 論文・図書としての発表
- (3) 対話の場の開設
- (4) 理論的考察
- (5) ウェブサイトの制作

### (1) 学会発表

サッポロ(豊平川のアイヌ語名称であり、地域名でもあるのでこのように表記する)にかつて存在したアイヌ・コタンから、あるドイツ人が1879(明治12)年に盗掘した遺骨の事例に関して、その歴史的な文脈と現在における返還 / 帰還の可能性について調べ、これを2018年度の日本文化人類学会および日本平和学会において発表した。そこで明らかになったことは、先住民族の遺骨の収奪を、19世紀後半から20世紀後半にかけて欧米の学会(この場合、ドイツ人類学・民族学・先史学協会)や大学・博物館などが組織的に行ったということである。またそれはより総合的な植民地主義と絡まり合って実行された。サッポロの例では、明治政府による北海道の植民地政策によってこの地のアイヌ・コタンが明治10年代初頭までに無人化され、その結果、墓地からの盗掘が容易になった。次にその遺骨を、研究者が人種主義的な研究の「標本」として位置づけることで、さらなる「収集」の呼び水となった。この人種主義は、植民地支配を支えるイデオロギーであったと共に、植民地主義の浸透に伴って強化されていった。この絡まり合いの中で重要な役割を果たしたのが、人種主義的な人類学と、その分野で行われた先住民族の遺骨の「研究」に他ならない。これらの植民地主義的な思想と実践のより根本的な前提となったのが、「自然 / 文化」の分割であり、「自然」を人間による支配の客体とするイデオロギーである。ゆえに根本的な脱植民地化のためには、この分割の解消が課題となる。これについては(4)理論的考察で取り組んだ。

### (2) 論文・図書としての発表

上で挙げた学会発表の内容は学術誌(小田2018)や論文集(小田2019)に活字として発表した。さらには「地図の脱植民地化」というコンセプトのもとで編集した図書『北海道大学もうひとつのキャンパスマップ』(北大ACMプロジェクト2019)にもつながった。その図書で小田は2

つの章(「あるアイヌ遺骨のふるさと」「古河講堂と足尾銅山鉱毒事件」)を執筆した以外に、出版企画の全体的な構想にも参画した。

この研究課題の調査を通して明らかになったことは、北海道大学札幌キャンパスはかつてアイヌ語でコトニと呼ばれていた土地の上であり、明治10年代初頭までアイヌのコタン(コミュニティ)とイオル(生業領域)がそこには存在していたということである。しかし上述のように明治政府の植民地政策のためにその土地は官有地に組み込まれて、アイヌの住民は移住を余儀なくされ、現在ではその記憶は忘却・不可視化され、今のところ実際のキャンパスにも、公式のキャンパスマップにもその歴史は記されていない。そのアイヌ・コタンの地点を明記した「もうひとつのキャンパスマップ」を作成し、植民地化された記憶の風景を問い直すすべしとした。

### (3) 対話の場の開設

本研究課題の公共的・実践的な課題として、遺骨問題などに関する当事者の声を聴き、関係性を紡ぎ直す「対話の場」の開設があった。そのひとつの実践として勤務校の同僚との共働で、「北大とアイヌ」を考える連続学習会」を2020年1月から開始し、2021年7月までに第8回を数えた。この他に、日本平和学会2017年度春季研究大会を北海道大学で開催し、部会「アイヌ・ネノ・アン・アイヌ：アイヌ民族の声を聴き、対話の場を開く」のコーディネートを担当した。こうした場で、遺骨の返還を求める当事者=子孫の方々から上がったのは、大学に謝罪と説明、そして元の土地への返還を求める声である。これらの声にどう応ずるのが問われている。それを聴くにつけ、遺骨の「研究」とその後の大学の対応が、奪われた側にどれほどの怒りと心労と痛みをもたらすのかということが思い知らされ続けた。こうした声が聴かれる場が、関係の改善の前提として不可欠であることはこれまでの経験から明らかである。また遺骨発掘が行われた当時の資料の検討も行なったが、それによって判明したことは、北海道におけるアイヌ民族の遺骨の発掘の「違法性」を示す文書が仮に見つからなかったとしても、その発掘は遺族やコタンの住民の承諾という研究倫理上の手続きを踏まない「非倫理的」なものであったということである。この点の認識も、今後の対応のために重要である。

### (4) 理論的考察

脱植民地化が向かう先はどのような世界か? 「自然/文化」をシームレスに捉えることのできる枠組みとはどのようなものか? これらの問いの探求は、本研究計画の重要な縦糸であり続けた。それは近代市民社会的な解決策(裁判、権利の回復)とは次元を異にする問いである。近代市民社会自体が植民地主義と合わせ鏡のように成立したからである。「人間」と「自然」の明確な分割、前者(主体)による後者(客体)のコントロール、それを前提に成立している人間中心主義的な近代社会。こうした極めて特殊なシステムが、「自然」に近いと分類された(「先住民族」とカテゴライズされる)側の植民地支配と、その一環として遺骨の収奪を行ったのであり、根本的な脱植民地化のためには近代的な「人間」と「自然」の分離という前提を根本的に問い直して、それとは違う枠組みを考える必要がある。ここでは「人間」と「自然」とをつなぐ基層として「生命」に立ち寄り、その枠組みを「いのちの風景」「生きている世界」などの概念で考えてきた。その理論的考察の現時点での総括を「いのちの網の目の平和学」という論文として発表した(小田2021)。

### (5) ウェブサイトの制作:

この研究成果の集大成と言えるのがウェブサイト「脱植民地化のためのポータル」の制作である。これは当初の計画には無かったが、次のような経緯で立案・制作するに至った。2017(平成29)年度から2021(令和3)年度に渡る本研究の実施期間中、大きな影響を及ぼしたのが新型コロナウイルス感染症である。海外での実地調査を重ねながら当初の研究目的を達成する計画であったが、この予期せざるパンデミックのために後半の2年間にはそれが不可能になった。そこで前半の3年間で行った調査の知見と、そこで培ったネットワークを活用して実現できる、公共人類学的にも意義のあるプロジェクトだと考えたのがウェブサイトの制作である。それは雑誌や書籍などの活字媒体よりもアクセスしやすく、また写真、動画、図などとも組み合わせやすい利点があるからである。2020年度から構想を練り始め、最終の2021年度に「脱植民地化のためのポータル」というタイトルで完成し、公開した(URL: <https://decolonization.jp>)。

このウェブサイトの目的は、世界各地の脱植民地化の現場(フィールド)を知るためのポータル(入口)を提供することにある。今日でも継続する植民地主義およびそれに抗する取り組みが見えるようにすること、そして脱植民地化を目指す人々がそれぞれに有益な情報を共有し、つながり合える場(フォーラム)となることを目指している。

その目的を形にする上で、次の3本柱をコンセプトとした:

**つながり:** つながりの中からサイトのコンテンツが生まれ出され、またそのコンテンツがつながりを生み出す。その動きの中でサイトが育っていく。遠く離れた現場(フィールド)をつなぐ。しかし遠い所の「他人事」で終わらせず、足もとをふり返って自分との関わりに気づくように工夫をする。

**共働:** サイト管理者(小田)だけが作るのではなく、各コンテンツの協力者、その現場の人たち、その現場とつながっている人たちと共に、対話的にコンテンツを作り上げていく。学術の

領域だけに留まって、専門家だけに向けて発信するのではなく、関心のある市民、学生、当事者にも伝わるようにする。特に脱植民地化の現場の人たちは「研究対象」などではなく、同じ脱植民地化という課題に違った立場で取り組む共働者である。また当事者としての「専門知」から学び、アドバイスを受ける。

**具体性**：抽象的な数字や説明で終わらせず、また情報や資料だけを収録するのでもなく、具体的な現場で生きる人と知り合えるようにする。具体的な取り組み、声、生きる姿を伝える。植民地主義とは、他者を一方的に抽象的なカテゴリーに押し込めて、客体化して支配することであった。「客観的な学問」もまたそれに陥ってきたのではないか。これに対して、具体的な、顔と名前のある相手として出会い直す。さらに人だけを切り取るのではなくて、その人が他の人、生きもの、環境と共に生きている風景をも伝えるようにする。

そして、本研究課題の実施期間中に調査を行った次の3つのフィールドを取り上げた：

#### **ペルー アヤクチョ：武力紛争で奪われた家族の記憶**

1980年からの約20年間にペルーのアヤクチョ地方を中心に吹き荒れた武力紛争によって、約7万人の犠牲者が出て、その内の約2万人はいまだに行方不明となっている。この犠牲者の多くはアンデスの先住民民族である。行方不明の家族を探す女性たちが連帯をして立ち上げたのが「ペルー誘拐・拘束・行方不明者家族の会（略称：ANFASEP）」である。そのメンバーが、武力紛争で奪われた自分たちの家族の記憶を留め、こうした暴力を二度と繰り返さないために、アヤクチョ州の州都ウワマンガに「記憶博物館」を設立した。このウェブサイトでは記憶博物館の展示内容を、写真と日本語訳のテキストにより「バーチャル記憶博物館」の形で閲覧できるようにした。まずフロアマップを示し、複数のアルファベットのいずれかをクリックすると、その該当箇所のコンテンツを見ることができる仕組みとした。この他に、ANFASEPメンバーの武力紛争の記憶の証言集『沈黙はいつまで』（原書スペイン語）の日本語訳を、バーチャル記憶博物館と相互リンクして掲載した。そして、現代のペルーにおける遺骨の返還／帰還の現場を取材した写真集『痛みの帰還』をも収録した。これは研究目的で持ち出された遺骨の返還／帰還とはコンテクストが異なり、武力紛争において証拠隠滅のため秘密墓地に葬られた遺体の探索と発掘、そして故郷への帰還の記録である。以上3つのコンテンツから成るアヤクチョ編は、ペルーの国内武力紛争に関して、日本語でまとまった形で読めるはじめての資料となった。（なお、このアヤクチョ編制作の業務委託費として小田が研究分担者となっている科学研究費補助金・挑戦的研究（開拓）「もの、語り、アート、宗教にみるトラウマ体験の共有と継承：ホロコーストと原爆投下」研究代表者・田中雅一を用いた。）

#### **カナダ ユーコン：大学と先住民民族との共働**

これはカナダのユーコン大学に留学経験のある研究協力者・葛西奈津子が、現地における大学と先住民民族との共働の実際を、カナダの先住民民族に関する背景情報（先住民民族女性・少女の失踪/殺害事件、先住民民族寄宿学校制度、先住民民族のトラウマ、研究倫理、stewardshipの概念など）と共に詳細に報告したものである。先住民民族との共働は日本の大学、特に北海道大学においてこれから取り組むべき課題であるので、その際にこのユーコン大学の事例は有益なロールモデルとなるであろう。このユーコン編の内容は、そのための具体的な情報源として今後大いに活用されるはずである。

#### **日本 サッポロ：アイヌ・コタンのある風景と遺骨の帰還**

かつて存在しながら、現在では忘却・不可視化されている、サッポロのアイヌ・コタンに関する調査結果を示したのがこのページである。現在のサッポロの地図の上に、アイヌ・コタンの場所をアルファベットで掲げ、そこをクリックするとそれぞれのコタンの概要を知ることができるようにした。関連する資料の多くが入手困難であるので、転載許可を取った上で、原文を掲載して資料集としても使えるようにした。コトニ・コタンやその上に作られた北海道大学が関わる遺骨問題については、関心のある人々の参考となるよう特に詳細な情報・資料を収録した。このページはまた『北海道大学もうひとつのキャンスマップ』の試みをサッポロ（およびイシカリ）地域に拡大した、いわば「もうひとつのサッポロマップ」であり、これを参照しながらこの地のアイヌ・コタンの歴史を辿るツアーを行うこともできるであろう。実際にそのようにこれが活用されて、サッポロの地図と記憶の脱植民地化に寄与できることを目指している。また約140年前にコトニ・コタンの墓地から盗掘されてドイツに運ばれ、2017年に日本に戻されたものの、現在は白老の慰霊施設に置かれているアイヌ男性（の遺骨）が、ここに記された情報を基に、再び故郷の土に帰還できる日が訪れるよう願うものである。さらには現在サッポロに暮らすアイヌの方々（とその子どもたち）が、ここに書かれているアイヌ・コタンの歴史とつながって将来新しい形でコタンが蘇生すること、そして人間（アイヌ）ばかりでなく、川や山や草木や魚や動物などの存在（カムイ）が互いに育み合ういのちの風景、あるいはいのちの大地（モシリ）の再生への願いを込めて、このサッポロ編を作成した。

当初の研究目的に照らして振り返ると、世界各地におけるアイヌ民族の遺骨の収蔵状況の調査は幅広くできなかった。その手がかりとなる情報はあり、裏付けを取る作業は今後の課題である。また私が「グローバル人骨流通ネットワーク」と呼ぶ、かつて存在した研究者・機関のネッ

トワークの具体的な解明も将来なされるべきである。しかし、新型コロナウイルス感染症のパンデミックという予期せざる出来事によって閉じられたドアとは別の所に開いたドアを開くことで、上述のウェブサイト「脱植民地化のためのポータル」を実現することができた。これは思いがけない展開であったが、公共人類学的な研究と実践の有意義な実例のひとつを示し得たと考えている。今後はこのサイトの補充とメンテナンスを行って、脱植民地化のためのつながりと対話と共働の場として育てていきたい。

生きている自然から人間が自らを分離する以前の世界を捉え、言葉にする仕事はまだ緒に就いたばかりである。論文(小田 2021)を執筆することで、それを「生命的自発性」をキーワードに生命論として展開できるという見通しが立った。この方向に進めば、主客の分離を暗黙の裡に前提にした文化人類学の姿を変え、人類学の生命論的な基礎づけをすることになるであろう。ひいては深い脱植民地化が向かう先、あるいは立ち還る世界を顕にすることにつながるはずである。本研究課題を締め括り、次なるステージとして取り組んでいるのはこの仕事である。

#### 引用文献

小田博志 2018「骨から人へ：あるアイヌ遺骨の repatriation と再人間化」『北方人文研究』11：73-94。

小田博志 2019「ドイツから「移管」されたあるアイヌの遺骨と脱植民地化」松島泰勝・木村朗(編著)『大学による盗骨 研究利用され続ける琉球人・アイヌ遺骨』耕文社：137-152。

小田博志 2021「いのちの網の目の平和学」『平和研究』56：1-26 (DOI：<https://doi.org/10.50848/psaj.56002>)。

北大 ACM プロジェクト(編)2019『北海道大学もうひとつのキャンパスマップ：隠された風景を見る、消された声を聞く』寿郎社。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小田博志	4. 巻 0
2. 論文標題 あるアイヌ遺骨のふるさと	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道大学もうひとつのキャンパスマップ	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小田博志	4. 巻 なし
2. 論文標題 ドイツから「移管」されたあるアイヌの遺骨と脱植民地化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学による盗骨	6. 最初と最後の頁 137-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小田博志	4. 巻 11
2. 論文標題 骨から人へ：あるアイヌ遺骨のrepatriationと再人間化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北方人文研究	6. 最初と最後の頁 73-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小田博志	4. 巻 56
2. 論文標題 いのちの網の目の平和学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 平和研究	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50848/psaj.56002	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小田博志	4. 巻 0
2. 論文標題 北海道を脱植民地化する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道で考える平和	6. 最初と最後の頁 111-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 小田博志
2. 発表標題 アイヌ民族の遺骨のrepatriationと人類学者の公共的役割
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小田博志
2. 発表標題 先住民族遺骨のrepatriation (返還 / 帰還) と脱植民地化 : 東京大学・小金井良精が「収集」したアイヌ遺骨を事例に
3. 学会等名 日本平和学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小田博志
2. 発表標題 誰が返還するのか? / 誰が帰還するのか?
3. 学会等名 九州大学比較社会文化研究院シンポジウム 「アイヌ遺骨・副葬品のゆくえ 返還をめぐる科学・文化復興・尊厳の言説」 (福岡市博多区・JR博多シティ) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小田博志
2. 発表標題 ドイツと旧アフリカ植民地との「特別な」関係：遺骨返還問題を事例として
3. 学会等名 第230回 京都大学アフリカ地域研究会（京都市左京区・京都大学アフリカ地域研究資料センター）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroshi Oda
2. 発表標題 Odyssey of an Ainu-skull: From Bone to Human Being
3. 学会等名 Transnational Conference “ Prussian Colonial Heritage: Sacred Objects and Human Remains in Berlin Collections ”, (Berlin, Centre Fran&cedil;ais Berlin)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 波平恵美子、小田博志、仲川裕里、浜本まり子、森田久仁子、道信良子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 234
3. 書名 文化人類学（第4版）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ウェブサイト「脱植民地化のためのポータル」（URL： <a href="https://decolonization.jp">https://decolonization.jp</a> ）の制作と公開（2022年3月）
---



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	葛西 奈津子  (Kasai Natsuko)		独立系研究者

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関